



2009年4月1日放送

印象に残る症例 ①

横浜朱雀漢方医学センター センター長 熊谷 由紀絵

漢方薬を処方して患者さんの治療にあたっていると、単なる自覚症状の改善にとどまらず、その方をとりまく環境の変化を招いたり、患者さん自身の生き方に少なからず影響したりといったエピソードを経験することがあります。東洋医学がひとりの人間を、その生活背景まで含めて、丸ごと診ていくスタンスに立っているためでしょう。今回はそうした中から、抑肝散という漢方を中心に処方して印象的な経過をたどったケースをご紹介します、この処方のもつ魅力についてお話したいと思います。

患者さんは56歳の女性、Yさん。姑の介護をしながら夫や子供の面倒をみ、家計を助けるためにパート勤めまでしていた方です。「とても疲れやすい」というのが、初診の時の訴えでした。普段の生活について少しお尋ねしたところ、姑は数年前から認知症がすすみ目が離せない、けれどヘルパーさんを頼むのにお金がかかるので仕事もやめられない、といいます。この時点では夫や子供の協力体制が驚くほど希薄で、ひとりで何もかも抱え込み、てんてこ舞いしている様子がかがえました。「食欲はありますか?」「夜は眠れていますか?」という私の問いかけに、「食事は、家族のために作った残り物を食べるだけ。味わっておいしいと思うことなんてありません」「夜遅く家事を終えてやっと寝付いても、姑のト

イレでそのたびに起こされます」と悲しそうに答えるばかり。

診察をすると、脈もお腹も底力のない弱々しい所見でしたので、まず初診では補中益気湯を処方させていただきました。この漢方は体力に自信のない、いわゆる虚証の方で、気力の低下や食欲不振がみられる方に適しています。患者さんからは「漢方ってもっと飲みにくいと思っていたけど、これはおいしいですね。のむとほっとします。」という感想がかけられました。こうした言葉が出るうちはやみくもに処方を変更せずに、同じ薬を出しながら患者さんを見守りなさい、とは東洋医学の師匠である森由雄先生から教わったことです。そうして約半年、補中益気湯を投与しながら経過を追ううちに、患者さんの顔に少しずつ赤みがさし、脈やお腹にも底力が感じられるようになりました。ちょうどその頃からです。家族に対する不満を、頻繁に口にされるようになったのは。「子供はもう成人していますけど、いまだに世話を焼かせるんです」「主人なんて、仕事のことしか頭になくて。母親の面倒は私に押し付けて、お礼の言葉もないんですよ」…少し様相が変わってきたな、と思いました。精も根も尽き果てた初診の頃と違って、口調や視線には力があります。

そこでもう一度お腹の所見を取り直すと、以前より腹部大動脈の拍動や肋骨の下の抵抗感がはっきりと感じられるようになっていました。東洋医学の用語ではそれぞれ「臍傍悸」と「胸脇苦満」と呼ばれる所見です。ちょうど補中益気湯によってエネルギーが補われた後に、その方を傷めつけてきた本当の原因が浮かび上がったような印象です。そこでこの時点で、処方を抑肝散に変更しました。抑肝散という漢方薬の、処方キーワードは「ストレス」と「怒り」だと思います。とくにこの患者さんのように、じっと耐え続けて「怒り」を内にためこむタイプに、この処方の適応が多いようです。逆に、すぐに爆発する瞬間湯沸かし器タイプなら別の処方、たとえば実証向きの黄連解毒湯や桃核承気湯などのほうが適しているといえるでしょう。

さてこの患者さんにとって一番良かったのは、抑肝散を服用したことで、それまでの漠然としたイライラ感から解放されて落ち着きを取り戻し、自分の思いを言葉にして家族に伝えられるようになったことでしょう。夫も子供も決して無関心を装っていたわけではなくて、何もかも抱え込む自分をどう手助けしていいのかわからなかったらしい…と、その方は改めて気付かされたようです。きっと抑肝散を服用する前には、疲労やイライラをいつも後ろ姿に漂わせて、ご家族の取りつく島を与えない雰囲気だったのでしょうね。「そうそう、先生には言ってなかったけれど、最近蕁麻疹が出なくなりましたよ。肌が弱いのだとばかり思っていたんですけど。頭痛持ちのはずが、これもずいぶん良くなっちゃって。いやあね、みんなストレスのせいだったのかしら」と後日、患者さんから追加のご報告がありました。実際にこの患者さんのほかにも、抗アレルギー剤ではいまひとつよくならない蕁麻疹が、抑肝散をはじめとする種々の「ストレス対抗型」の漢方薬でよくなるケースをいくつかみることがあります。

さてストレスという代物は、イライラや不眠などのほかにも、様々に厄介な症状をひき起こす原因となります。たとえば眼瞼痙攣もそのひとつ。他人に気づかれない程度でもご

本人の不快感が強く、数日も続くとさすがに「何とかありませんか」とご相談を受けることの多い症状です。抑肝散は初期のうちなら、この症状の特効薬といっても過言ではありません。またストレスがかかると血圧が上がるタイプの方には、降圧剤と一緒に安定剤、ではなく抑肝散を併用すると眠気やだるさなどの副作用の心配がほとんどなく、血圧を安定させることができ、患者さんからも喜ばれます。抑肝散は比較的虚証の方向きの処方ですが、もっと実証の方には柴胡加竜骨牡蛎湯でも、同じように血圧の安定を図れるものです。イライラの募る会議や打ち合わせに追われる立場の方などに、とくにお勧めしたい組み合わせですね。

さて現代社会では大人だけでなく、子供たちも何かとストレスに見舞われながら暮らしています。とくに核家族化の進んだ地域では、おじいちゃん・おばあちゃんというシェルターを、多くの子供たちが失ってしまいました。そうした‘昼間はお母さんと二人きり’、の環境に慣れた子供に弟や妹が生まれると、お母さんの関心を自分に引き戻すために、「赤ちゃん返り」をすることがあります。新しい環境で何とか自分を守ろうとする行動なのですが、これには手を焼いているお母さんも多いことでしょう。そこで、いままで割とおとなしく聞き分けの良かった子が、急に下の子をいじめたり泣き騒いだりするようになったときは、抑肝散の出番です。逆に、めそめそとお母さんに甘えて離れないようなら、甘麦大棗湯のほうがよく効く印象を持っています。

また、「ストレス」「怒り」とともに、「抑制のきかない攻撃性」も抑肝散の投与目標といえます。このキーワードがよくあてはまるのは、認知症の患者さん。療養施設で生活していらっしゃる方が、ひどく攻撃的であったり興奮しやすかったりすると、集団生活がうまくいかず、介護者の負担が大変に大きくなるものです。抑肝散は、こうした方々に一定の効果を発揮することが明らかになっていて、すでに多くの投与経験をお持ちの先生が、そのデータを解析され発表されている分野でもあります。これからの高齢化社会でも、ますますその活躍の場を広げていく処方といえるでしょう。

今回お話した抑肝散は、保嬰撮要という書物に収められた、もともと子供向けの処方でした。それが時代を超え、「ストレス」と「怒り」に見舞われる現代人に欠かすことのできない漢方薬となっていることには不思議なつながりを感じます。この処方を上手に選ぶコツは、患者さんのお話をよく聞いて、症状の背景に「ストレス」や「怒り」が隠れているのを見抜くことです。また主訴がどんな内容であっても、通り一編の治療では改善しないとき、もう一度患者さんの状態を丹念に見直すことで、その証が見いだせるかもしれません。いまや年齢・性別を問わず、その適応が広がってきた印象をもつ抑肝散。今回ご紹介した症例のように、患者さんとその周囲までを含めたライフスタイルを良い方向に変えてくれる可能性のある、魅力的な漢方処方の一つです。